

## 連載

## 星座の名前と歴史 (2)

## ～学名と日本語表記について～

福江 純 (大阪教育大学)

## 1. はじめに

ぼくの補足は初回の松村さん記事[1]の付録でよかったのですが、記事がよく完結していたために、浮いてしまいました。稿を改めて、簡単にまとめてみます。

まず ML では以下のコメントをしました。

---

件名：Re ペガサス座とペガサス座

成田さま、みなさま

福江@大阪教育大学です

半田さんのメールにラテン語表記とありましたが、学名について、少し補足コメントです。

教科書の用語は学術用語集に準拠するのですが、用語集より上位の根拠として学名があります。自然界のありとあらゆる事物・事象には、学術的な正式名称が付けられていて、それが学名です。学名は、その分野の学術団体が定めるものなので、文科省の役人などとは関係ありません。

#もちろん学術用語集には学名以外の用語も多数あり、輻射(ふくしゃ)や較正(こうせい)は役人が退けましたが。

そして学名は、国際的にはラテン語で名付ける約束事があり、その日本語名は漢語ではなく和語のひらかな(あるいはカタカナ)で付ける約束事になっています。←研究者の慣例で法律ではありません

星座名もちろん学名で、1922年から1928年にかけて、IAUが全天88星座に整理したときに定めたのだと思います。(これは確認を取っていません)

問題の Pegasusu ( $\alpha$  Pegasi は属格)の読みですが、学名的には、ギリシャ語読

みでも、ましてや英語読み(オリオン?)でもなく、ラテン語での発音が正しい読み方になります。くじらやみずがめなど、和語があるものは別ですが、オリオン、ヘルクレス、ペガサスなどは、ラテン語読みに近いのかもしれない。←ここは推測

上記のIAUの策定時に天文学会で決めたのだと思います。←ここも推測

いずれにせよ、「ペガサス」が正しい表記(学名)になります[2]。後略。

[tenkyo:06576]、2016年3月1日

---

以上で尽きてはいるのですが、まあ、補足の解題ということで、もう少し調べたことを書いておきます。

## 2. 学名はラテン語で

## 2.1 リンネの二名法

ホモ・サピエンス・サピエンス (*Homo sapiens sapiens*)、聞いたことはあると思いますが、“知恵のあるヒト”という意味をもつヒトの学名です[3]。

1回生向けの「科学の読み書き力」という講義の2回目ぐらいで、科学の体系について概説するとき、科学の源流としてギリシャ時代の話をしつめます。その際に、スキエンチアとサピエンチアという並立語を書いて、それぞれの意味を問います。スキエンチアはサイエンスの語源で原意は“知識”、サピエンチア(ラテン語ではサピエンス)の原意は“智慧”だとか、英語では knowledge と wisdom と綴りがかけ離れてしまったけど日本語では知識と智慧がまだ言葉で並立しているとか、科学は明治時代に作られた言葉で“諸科の学”

の意だとか、まあ、ごちゃごちゃと話します。

さて、このような自然界の事物の学名は、もともと、スウェーデンの博物学者で、分類学の父と称されるリンネ (Carl von Linne; 1707~1778) が体系化した「二名法」がもとのようです。

二名法とは、ある特定の生物を、ラテン語の属名と種名の二つの名前でもラベルしていく方法です。ヒトの場合だと、ホモ・サピエンス (Homo sapiens) が二名法による分類名となります。生物の分野では、「国際動物命名規約」とか「国際植物命名規約」などがあり、かなり厳密に命名しているようです。

一方、生物学以外の学問分野では、それほど厳格ではなさそうですね。たとえば、水晶の学名は Quartz ですが、英語だし二名法になっているわけでもありません。レプトン(軽粒子)やタキオン(超光速粒子)など素粒子の名前も、“軽い”を意味するギリシャ語や“速い”を意味するギリシャ語と、ギリシャ語で“粒子”を意味する接尾語 (on) からできています。化合物の命名もルールはあって、たとえば、水 (H<sub>2</sub>O) だと、ルールにしたがえば、酸化二水素 (di-hydrogen oxide) になるようですが、有機化合物の場合は果てしなく長い名前になった覚えがあります。

なお、ラテン語はローマ帝国の公用語で、中世ヨーロッパでは長らく使われ、現在でもバチカン市国では公用語だそうです。文法は果てしなく複雑なようで、名詞に限っても、格変化が主格・属格(所有格)・与格・対格・奪格が単数と複数で計 10 格、第 1 変化名詞から第 5 まで男性名詞や中性名詞などの変化が 5 つあり、格変化と変化名詞で計 50 パターンの変化になるそうです。ここらへんで、その先を読むのは諦めました[4]。

星座に関しては、とりあえずは、主格と属格(所有格)があることを押さえておけばよさそうです。

## 2.2 バイエル符号

星座の学名は、学名の慣例によってラテン語で表しますが、やはり生物学の二名法ほど厳格ではありません。

例：おおいぬ座 Canis Major

おおいぬ座は Canis Major ですが、“大きい (Major)” が後ろから掛かっているだけで、属名と種名というわけじゃないです。

また星座の個々の星は、星を示すギリシャ文字(おおむね明るい星から、 $\alpha \beta \gamma \dots$ )に星座の学名(属格)をつけて表します。星座名が後ろから掛かるために、星座名は主格ではなく属格(英語の所有格)とします。さらに星座名(属格)を 3 文字に短縮した略号、いわゆる「バイエル符号 (Bayer symbol)」で表すことも多いです。

例：おおいぬ座アルファ星 (シリウス)

$\alpha$  Canis Majoris (省略形  $\alpha$  CMa)

このバイエル符号は、ドイツの法律家ヨハン・バイエル (Johann Bayer; 1572~1625) が、1603 年、31 歳のときに出版した全天星図『ウラノメトリア Uranometria』で発表した恒星の命名法で、その後、天文の業界で広く使われるようになったものです。

と、ここまで書いてきて、今回、はじめて知ったのですが、バイエルの方がリンネより 100 年以上も！早いですね。二名法のところ訂正します。リンネがバイエルを真似したわけでもないでしょう。中世の知識人は教養としてラテン語を嗜んでいたそうですから、日本人が事物の名称を漢字で付ける感覚で、ごく当たり前にラテン語を使ったのだと思われれます。

なお、上にも書いたように、星座名の略号は、ラテン語表記の属格を 3 文字程度に省略したもので表します[5]。たとえば、みずへび座 (Hydrus) の略号は Hyi で星座名(主格)には存在しない“i”を含みますが、これはみずへび座の属格が Hydri のためです。同じく、

や座 (Sagitta) の略号に含まれる“e”は、や座の属格 Sagittae に由来します

例として、黄道 12 星座のラテン語表記と略号は、次のようになっています：

おひつじ (Aries) Ari  
 おうし (Taurus) Tau  
 ふたご (Gemini) Gem  
 かに (Cancer) Cnc  
 しし (Leo) Leo  
 おとめ (Virgo) Vir  
 てんびん (Libra) Lib  
 さそり (Scorpius) Sco  
 いて (Sagittarius) Sgr  
 やぎ (Capricornus) Cap  
 みずがめ (Aquarius) Aqr  
 うお (Pisces) Psc

### 3. 日本語名の表記はひらかな・カタカナで

月探査衛星かぐや[6]、小惑星探査機はやぶさ 2 [7]、有人潜水調査船しんかい 6500 [8]、南極観測船ふじ、すべて名前をひらかなにしてありますが、また実際ひらかな表記を目にするでしょうが、日本語独自の和名 (標準和名) は通常、ひらかな・カタカナで付ける慣習になっています。新幹線の名前[9]も船の名前[10]も、ほとんどがひらかなだと思えます。

日本固有の文字[11]が、ひらかな・カタカナであることから、乗り物などの名前には分野を問わず自然と大和言葉が使われるようになったのだろうと想像できます。

と、調べている最中に、JAXA のリポジトリで興味深い考察「なぜ人工衛星に愛称をつけるのか？」(神戸大学 3 年中野綾子) がありました[12]。いやいや、この報告の方が、よっぽどきちんと調べてあります (笑)。

### 4. まとめではないですが、まとめに代えて

ところで、日本語の問題について、本筋から外れますが、会員には教育関係者も多いの

で、日頃から思っている持論を少し書かせてください。

知っての通り、2011 年度 (平成 23 年度) より、新学習指導要領が実施され、小学校の第 5・第 6 学年で年間 35 単位の外国語 (実質は英語) が必修化されました。2020 年には小学 3 年生で必修とし、5 年生では教科化するようですが。いやはや何ともかやです。自国の言葉をないがしろにして (まあ、そういうつもりもないでしょうけど；言葉の綾です) 外国語に力を入れるのは、これはもう自国の文化をドブに捨てるに等しい悪行です。文科省のサイトには、役人の言い分は書いてありますが、あまりよくわかりません。国語力もままならない小学生に外国語 (英語) を教えても、日本語も英語もろくにできない子どもになるのは、日の目をみるより明らかでしょう。

みなさんも、そうだそうだと同意見でしょうか、それとも、文科省の方針も一理あるとお考えでしょうか。少なくとも、大阪教育大学においては、本心はどうであれ、法人化以降は文科省の言いなり状態です。科学研究の名目でプロジェクトを出しても決して通りませんが、英語必修化という政策動向に対応したプロジェクトなら多少の予算が付きまます (実際、2015 年度は、<理系英語力および学力増進プログラム>というタイトルで作文して、プロジェクト計画書を出して、少しだけ予算が付きました。今年度はどうでしょう)。

なお、誤解のないように書いておきますが、小学生に英語を教えるはいけないと言っているわけではありません。全員に強制的に履修させる悪平等がいけないと言っています。語学の才能がある子は、部活などでどんどん推奨し伸ばせばいいのです。しかし、ぼくのように語学の才能がない子にも強制的に教える、ただただ混乱するだけでしょう[14]。ピアノなどの音楽的才能や、絵画や書道などの

芸術的才能、さらには文芸的才能や数学的才能と比べてもよいです。言語学的才能がある子には、しっかり伸ばしてやればよい話です。

有名な話ですが、急いで列強に追いつくために、明治時代に日本語を捨てて英語にせよという“暴論”がありました[15]。当時は暴論ではなく、真面目な主張でした。それに通じる話ですが、脚注にも書いたように、現今のものは明治時代ほど深く考え抜いたものとは思えません。幸いに、明治時代の暴論（暴挙）は実現されず、文化は継承されています。

しかし、その種の暴挙を実践した例がすぐそばにあります。中国ですね。文化大革命で、知識層を放逐し、繁体字を簡体字に変え、中国五千年の文化を捨ててしまい、科学技術はもちろん、文化・文明が大きく後退しました。書道なども廃れてしまい、日本の書家を招いているぐらいです。漢字を廃止した韓国でも同様で、過去の文献が読めないそうです。いまや漢字文化がきちんとした形で残っているのは、日本と台湾だけのようです。

ぼく自身は、小学校での「英語必修化」は、「ゆとり教育」と同様な道を辿り、悪弊が目立っていつ、誰一人責任を取ることもせず、いずれはなくなると思っています。しかし、「ゆとり教育」時代の学力が愕然と落ちてしまったのと同様に、「英語必修化」時代の子どもたちは日本語の読み書き能力が落ちるのではないかと心配しています。先に書いた1回生向けの講義では、こういう時代だから（小学校の）現場では英語も教えなければいけないが、まずは日本語をしっかり教えなさいと、口を酸っぱくして言っていますが、卒業後に覚えていてくれるかどうか（笑）。

以上のことは、会員のみなさんは十分理解されていることかとは思いますが、現場では日本語もより丁寧に教えて欲しいと思います。

## 文献・注釈

- [1] 松村雅文ほか(2016)、天文教育、vol.28 No.3, p.15
- [2] 発音以外の話は、以前、本誌にも掲載したことがあり、詳しくは、『最新天文小辞典』の星座の項目や『天文宇宙検定 3級 公式テキスト』2章などにも書いてあります。
- [3] 日本語での分類名は亜分類を省略すると、動物界脊椎動物門哺乳綱サル目ヒト科ヒト族ヒト属 (*Homo*) ヒト種 (*Homo sapiens*) となります。
- [4] ニコニコ大百科(仮)という Web ページ <http://dic.nicovideo.jp/a/%E3%83%A9%E3%83%86%E3%83%B3%E8%AA%9E>
- [5] 今回いろいろ Web を調べたところ、略号が属格になることがきちんと書いてある Web ページはありましたが、国立天文台の Web ページでは書いてないですね。理科年表には書いてあるので、Web ページは一般向け仕様に簡略化したのでしょう。
- [6] 正式名称は SELENE (Selenological Engineering Explorer) で、かぐやは JAXA が行った一般公募で決定された愛称です。
- [7] こちらも正式名は MUSES-C で、はやぶさは愛称です。
- [8] こちらも一般公募で命名されたようです。
- [9] 国鉄の歴代の列車の名前がすべて大和言葉だったことを継承しているそうです。
- [10] 日本の船名については、国字(漢字・ひらがな・カタカナ)で記することが法令で定められているようです。
- [11] 日本語、和語、大和言葉の使い分けは、ぼくもまだ勉強が足りず、明瞭にできていません。あめ(あま)・そら・ほし・まほろばなど、日本古来の言葉が「大和言葉」で、漢字なども含めた全体が「日本語」でしょうか。「和語」はほぼ日本語と同じ意味合いでしょうか。漢字だから「漢語」(中国由来の言葉)とも限りません。たとえば、峠や袴のように、日本で作られた漢字-国字-もあります。また墓参(はかまいり)や心配(こころくばり)

や冥王星のように、和語を漢字に置き換えたものや、日本人が作った熟語も非常に多くあります。さらには、絵（え）や肉（にく）は古来の言葉かと思いきや、会得（えとく）などが漢語であるように、漢語らしいです。ここの話は、高島俊男『漢字と日本語』その他、同著者の本が勉強になります。

[12] 中野綾子「なぜ人工衛星に愛称をつけるのか？」

<https://repository.exst.jaxa.jp/dspace/handle/a-is/21794>

[13] ふだん気にもとめないと思いますが、日本語の文字には、表意文字の漢字、表音文字のひらかな・カタカナ、そしてローマ字（および英語）があります。電車の中吊り広告をみるとわかりますが、4種類以上の文字が配置してある国はないでしょうね。文字の種類だけではなく、漢字の当て字をしたり、熟語に別の読みをフリガナで振ったり、他の言語にはない表現法だと思います。このため、日本語は表記法に関しては世界でもっとも難しい言語の一つで、日本語の習得の難しさとなっています。でもこれこそが、日本語の多彩で豊かな表現につながっています。小学校時代に日本語をしっかりと習得すればこそ、大人になって気にもならないわけです。

[14] 実際問題として、ぼく自身、英語が苦手で困ったことはさほどありません。専門的な議論が突っ込んでできないぐらいですが、これはふつうの人は不要なスキルでしょう。外国へ行っても、英語圏はいざしらず、そもそも、フランスでも台湾でも英語は通じません。

[15] 日本語を廃止して英語を公用語にしよ

うと唱えたのは、明治の教育システムを作る中心にいた森有礼（もりありのり；1847～1889）です。福澤諭吉や西周（にしあまね）など急先鋒の学者たちが集って、日本語のローマ字化を主張していきます。また並行して（むしろ早くから）、前島密（まえじまひそか）などは、漢字廃止論（かなのみにする）を唱えていました。いま読みつつある、山口謡司『日本語を作った男－上田万年とその時代』がなかなか面白いです。ところで、福澤諭吉が社会・自由・権利など多くの造語をしたことは有名だと思います。それほど有名ではないでしょうが、西周も学術・哲学・心理学・地理学・物理学・化学・動物学・植物学・天文学・地質学など、学問名を訳出しています。彼らが、急いで西洋文明を吸収し、列強に対抗することを考えての急進的な主張だったのでしょう。国際化をグローバル化と言い換えて英語英語という輩とはまったく違った、明治の大先達だと思います。



福江 純

\* \* \* \* \*